

「見失った羊のたとえ」

2015年10月05日

ルカによる福音書 15章1節～7節。徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだした。そこで、イエスは次のたとえを話された。「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか。そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』と言うであろう。言うておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある。」

徴税人とは、ローマに届ける徴税を請け負った人で、民衆から税金を取り立てていた。罪人とは、犯罪人ではなく、重い病を負い、その病は神からの裁きであると言われた人である。徴税人や罪人は「汚れた者」として、イスラエルの共同体からはじき出され、人権を奪われていた。彼らは、主イエスの話を聞きたいと近寄ってきた。主イエスが疎外された人々を、人間として回復する言葉と業を表していたからである。

すると、ファリサイ派の人々と律法学者たちが「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と非難した。彼らは汚れた罪人と交わらないことによって、自らの「清さ」を保持していると思っていたのである。そこで、主イエスは譬え話をされた。百匹の羊を持っている人が、その内の一匹を見失った。彼は九十九匹を野原に残し、見失った一匹を探し回る。見つけたら、喜び、友達や近所の人々を招き「見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください」と言う。そして「言うておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある」と締めくくった。見失った一匹は疎外されていた徴税人や罪人であり、彼らは神に探し出されて、神の下に悔い改めた。悔い改める必要のない九十九人は正しいと自認するファリサイ派の人々である。主イエスは徴税人や罪人が神に見出され、人間回復したことを神は喜ばれると語った訳である。ルカ福音書の著者は「悔い改め」を力説する。

マタイ福音書 18章13節、14節の並行記事には「はっきり言うておくが、もし、それを見つけたら、迷わずにいた九十九匹より、その一匹のことを喜ぶだろう。そのように、これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない」と書かれている。マタイ福音書の方が、主イエスの思いを正確に伝えているのではないか。

ルカは「見失った羊」と書いているが、マタイは「迷い出た羊」と書いている。迷い出た羊は、通常小さくて弱い小羊と見なされる。羊飼いの話を聞くと、迷い出る羊は大きくて強い、わがままな羊だそうである。外典のトマス福音書 107には「御国は百匹の羊を持つ羊飼のようなものである。それらの中の『最大の羊』が迷い出た」と書かれている。迷い出る羊は「大物」らしい。現在、最も迷っているのは米国首脳たちではないか。彼らがしゃしゃり出ると戦争が起こる。日本では、安倍晋三首相が迷い出ているのではないか。彼らは迷っていることを知らず、安全と平和に寄与していると豪語する。国民は「迷い出ていますよ」と諭す責任がある。そして、自分自身が愛と正義と平和の神に留まり続けているか、真の悔い改めをしているかを顧みることが、何より大切であろう。